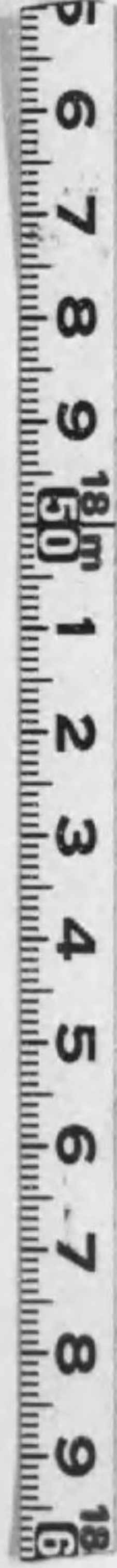


特116

710



始





特 116

710

項羽

橋辨慶

熊坂

小督

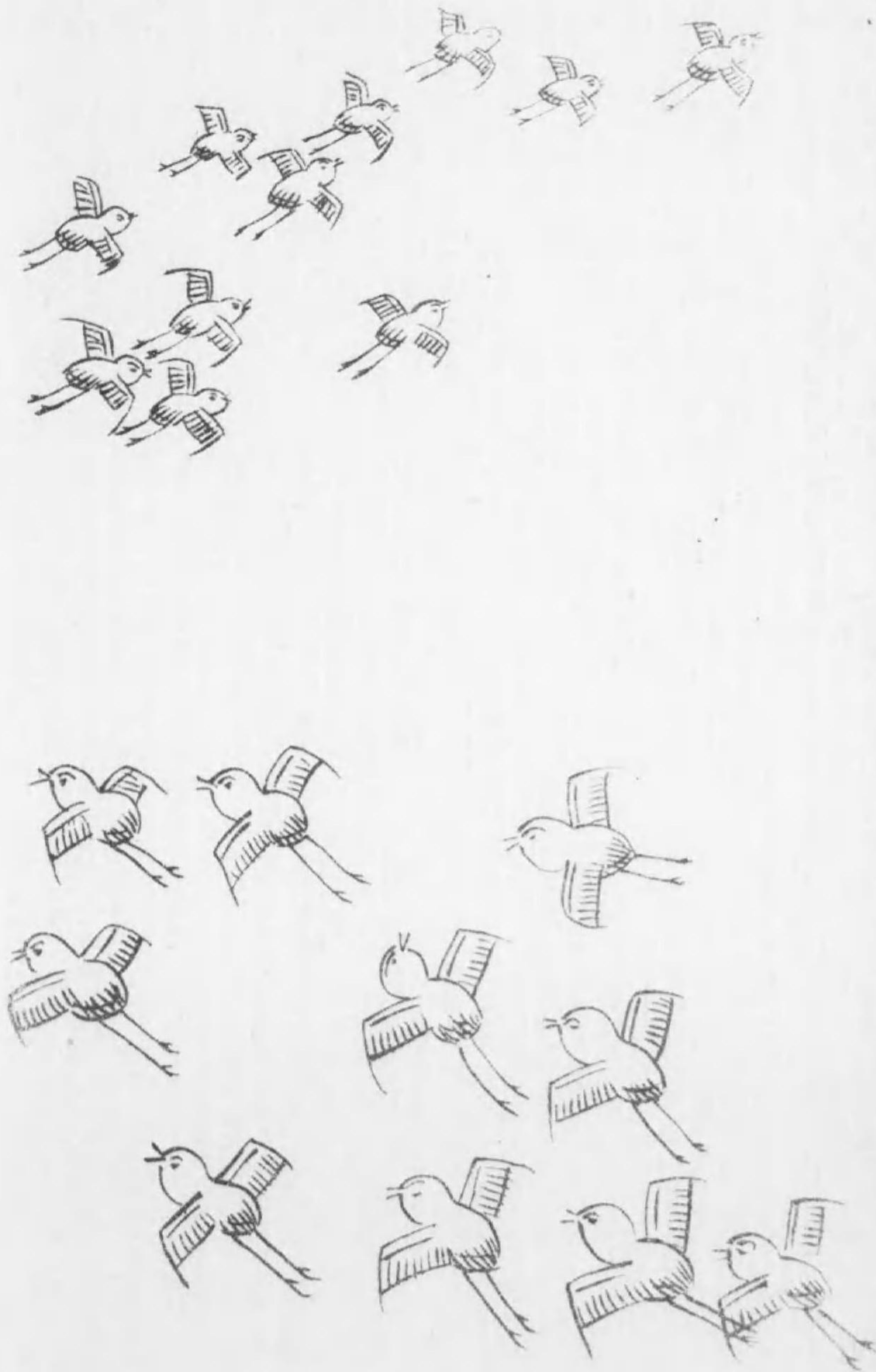
野守

觀世流改訂謄本

外四









特 116  
710



觀之  
世之

























其為よむと回づる由一は人あしきよ  
 何とて聊爾ある事やばら承つしき  
 一や船賃の由やばらし花のしゆ細か  
 せよとて。そし程もか草花はな  
 しや器かしてさうさう カフ 花は  
 一は。かきかひもいさかき カフ 花は  
 此花を賜ふ事かひも カフ 不思

議をなして多し草花の中。何  
 かさの花やに舞ひしはかき カフ  
 一は。いしてはかき カフ 草花の中。何  
 花 カフ 花 カフ 花 カフ 花 カフ 花 カフ  
 何 カフ 何 カフ 何 カフ 何 カフ 何 カフ  
 羽の店 カフ 羽 カフ 羽 カフ 羽 カフ 羽 カフ  
 空 カフ 空 カフ 空 カフ 空 カフ 空 カフ







ちも賢かぎ。馬よつかり〜とたう立  
 つて。いよ馬喜。我ら首とつて高祖  
 へ捧げ。名を揚げよやと呼ばらんども  
 呂馬喜の怒れて女づかき不覺なる  
 者の心かある。これ見よ後の世は語り  
 傳よとていびあむ。剣を抜いてあ  
 らくもあれと我ら首をかきおとす。呂

地  
 地拍子  
 呂馬喜ハノ  
 語出リ拍子ノ付ケ  
 方ニ古來ヨリ馬喜  
 ケシ、名アリギキ  
 ノ寸法、句ト心得  
 ベシ

馬喜は興へ其儘此原の露と消えよ  
 けり。流雲驢ハ膝を折り。黄ある涙を  
 流せざるのみ語り我ら心昔よ返る  
 身の果今ハ包まりわれとそハ。項羽ガ  
 幽霊あらせたり跡吊ひてたび給へ  
 跡吊ひてたび給へ

早秋  
 (三人)  
 侍話 ツヨク



聲ききて。浪ようきぬの夜となく。晝  
 もあやぬ吊ひの般若の船のおのづ  
 から。その僧をそく法の心を静め聲  
 をあげ早中一切有情殺害三界不墮  
 悪趣後シテ上昔八月御雲客うちかこみ  
 今ハ推歌野田の月。爛體霧深。古  
 松下の陰地苔給とどめて春日銘を

埋むシテ紫の雲向横きりしでたちん  
 引つ少女の調わか地上歌老む伎樂を  
 奏しつ打込打延老む伎樂を奏しつ。黄の  
 黄楊柳弾く。琴今深き。四面は岡の  
 聲をよぶれば。又執心の責め来るぞや。  
 あら苦の苦意打込打延やあ。虞氏ハ  
 思ふ堪へかねて地虞氏ハ思ふ堪へ



地拍子  
吟じて高樓よ

かね給ひて高樓よ昇りて落つる  
さながら涙の雨の身を投げ置  
あり給へど 舞働 項羽の虞氏が別と  
我が身の 地上 ありゆく草葉の露諸  
共消えはてし悲しき思ひ出れば  
剣も矛も皆投げ捨て身をとくも  
かりよ口惜かり 葉子物語を哀

●仕舞

ある 打込打返 あり 苦き 瞋恚の 焔  
あせり 苦き 瞋恚の 焔の ちあが  
りつ 身方を見れば 高祖よ 屬して  
寄せる 彼の 荒き 聲を 聞け 腹立  
ちとぞ 物見せんと みづから かけ出で  
敵を 必づ け 取つて 投げきて 又ハ  
き伏せ 捻ぢ 首さうくよ 怒り かり

頁目



ける勢をあらはしむる御書はあらぬに。馬は  
の野見守のま中の度までありよける。

橋辨慶

**解説** 牛若丸五條橋に辨慶と戦ひて獲へしことを作る。義経記に據りたる作たるべし。能本作者  
註文には作者不明とす。たれども追に後世の二百十番流目録には安清作とせり。古典に記録  
を以て。其曲はもと々香外に組み入れられたる。笛之巻(元文中)の鳥本には橋辨慶之前とあり。前  
叙としたる良長き曲なり。狸々金札。菊三三。童童等の例に於て。能を幼めたる。今日の如く改めたるに  
は非るか。笛の巻は辭句に古作の傳あれども。此曲の前段は流調頗る新しく。又笛の巻に後見たる非ずして  
は牛若丸の出の。さて牛若丸の竹せの重ければ。の二節餘りに度突の嫌あり。

謡ひ方梗概

天神へ云くもささりと扱ひ。其念に得外へを確りと。言諸通断の事をし。まは力ありて應へ。大勢に  
は通ふまじと。とむつり。おつと。込めて討たさらん。と。か。つて確りと。其意を。来て引き。後き掛合  
に入り。地渡し。前の見えず。と。十分た。か。つて。大。き。流。止。む。さ。あ。ら。ば。今。夜。は。ま。の。詞。は。と。り。と。出。で。  
水。い。同。を。取。り。て。い。や。辨。慶。は。ど。の。若。の。と。太。き。く。確。り。と。思。ひ。追。つ。た。る。体。に。言。ひ。は。ま。の。物。を。平。げ。ん。と。の。力。  
ル。を。ま。を。わ。け。て。さ。ら。う。と。扱。ふ。既。に。此。夜。も。ま。の。詞。は。調。子。を。折。折。し。て。確。り。と。強。み。に。起。し。山。路。の。鐘。も。す。ぎ。  
向。の。雲。の。と。む。つ。り。お。ど。し。に。流。せ。る。大。鐘。と。か。つ。て。大。き。く。い。と。よ。り。好。む。と。さ。さ。り。と。大。長。力。と。た。つ。  
ぶ。り。い。ぬ。ら。り。と。と。大。さ。う。た。い。か。な。る。天。魔。以下。確。り。と。定。み。な。さ。る。べ。し。辨。慶。か。く。と。も。い。は。か。つ。て。  
出。で。踏。み。高。ら。ま。ば。を。確。り。と。言。ふ。辨。慶。か。れ。を。し。は。さ。ら。り。と。取。り。見。つ。け。つ。と。氣。を。か。け。句。渡。を。十。分。に。  
切。り。て。調。を。か。け。ん。と。と。確。り。と。出。で。見。れ。ば。い。や。う。諸。氣。を。下。め。に。取。る。す。は。い。れ。若。よ。い。ま。は。勢。好。く。か。  
か。つ。て。謡。子。方。常。の。子。方。と。斯。か。途。を。異。に。し。掃。り。好。く。テ。キ。ハ。キ。と。謡。ふ。べ。し。出。の。さ。て。も。牛。若。は。い。  
ふ。べ。し。に。扱。ふ。川。風。も。い。ま。は。輕。き。や。う。た。シ。テ。と。の。間。答。は。き。び。く。と。あ。る。べ。く。ト。ト。輕。く。扱。ふ。地。初。の。神。  
ン。平。は。心。に。住。を。保。ち。て。い。か。も。謡。は。地。より。も。さ。ら。り。め。に。承。け。渡。す。が。宜。し。上。段。ト。ト。程。た。く。い。ま。は。力。あ。り。て。  
特。に。よ。く。は。前。より。は。稍。ゆる。か。た。確。り。と。附。け。通。し。と。り。さ。ら。り。と。なる。上。段。ト。ト。程。た。く。い。ま。は。力。あ。り。て。  
納。ま。り。好。く。出。で。風。速。し。く。い。や。う。か。つ。て。さ。ら。り。と。終。を。確。り。と。止。む。面。由。の。ま。ま。を。い。ま。は。上。段。は。意。が。す。に。  
調。子。好。く。謡。ひ。起。し。返。し。と。り。順。次。に。運。び。を。つ。け。音。と。特。に。い。や。う。か。つ。て。止。ノ。返。し。を。掃。む。長。力。が。が。て。い。  
以下は氣をかけて乗り調子に謡ひ、頭爽たる概あるべし。ロンギは心持を別にして、水い、堂見、か、なるべし。



「西塔の武蔵より辛りに互りては運外の花らぬやうも固く流ふも宜しとす。」

**西塔** 義經記に辨慶中て比叡山延暦寺の西塔に在りし由記せらる。武蔵坊辨慶

義經記に辨慶千人の太刀を奪ひ取らんと企て、夜を塔中の人太刀を奪ひ、既に九十九腰を取り、残る一

腰の遺物を得んと、五條の天神に参りての帰るに、道に半若に逢ひ、その黄金作の太刀を奪はんとして

果さず、翌夜また偶清水に行き違ひて、再び奪はんとして仕損じ、遂に主従の約をたうたる事を記せ

り。義經記には此他辨慶の事蹟につきて種々記する所あれども、源平盛衰記、平家物語等には一騎當

千の侍大将として譽げたる外、深く何事も記さず、吾妻鏡には僅に二箇所に其名を出せるのみにて一切の記

録無し。されば實際は諸謡曲及び後世の戯曲等に作られたる如く、義經辨慶中の主座たりし天下無雙の

剛の者には非りしなむべく、義經記作者の小説的記事

より、源次敷術せられたる假作的な見方を至當とす。宿願 かわせりたるたてた

五條通即ち今の松原通西側院 丑の時詣 丑の時は今の午前二時頃、此夜陰に参詣するは素願の満

西南隅にある五條天神社。 蝶馬 大太刀に對して小太刀の構、蝶馬、おごの輕捷

冬 傳期したる祈願の日 五條の橋 今の松原 小太刀 大太刀に對して小太刀の構、蝶馬、おごの輕捷

語道断 言機に絶せらる意、聖路徑に 天魔鬼神 天魔は天界の魔王、鬼神は靈驗ある鬼、たつとり込めて

取り込めての釣りたるなり、前 神變 人智にて測り知る 奇特 奇異特殊

後左右より取り圍みての意、かゝしらす かの意、前後いかでまじまじと身討ち取り給はんや

寄せ合せ 取て武力を以て 牛若 義經の幼名、義朝の死後、母の常盤は半若を法所に

の意をもち、何と身討ち 聞き遁げ 聞き逃がして 無念 念をもちて

たすらんかとおあるべき所なり、夕べ 言ふの音

引きかへて 常には逆りての意、常 義經の幼名、義朝の死後、母の常盤は半若を法所に

たの法を看りたるなり、半若 義經の幼名、義朝の死後、母の常盤は半若を法所に

光房の阿闍梨に頼みて入門せしめたる事、義經記、平家物語等に出で、其辨慶を従へたるは義經記

に據りたる鞍馬に上りてより遂に後の事なり、さればここに突然、母の仰の重けられたることを具に

唐突なり、思ふに古くは現に番外の曲として存せらる留之巻を前段として作せりし、寺 鞍馬寺

を、後世社の省果上の都合により前段を改めたる為、斯く不用然となりし、川波 鞍馬寺

寺 鞍馬寺

鞍馬山の羊服に在り、名残かれは云、實生流に在り、名残をいとほしき道に川波添へては懐けたり

にといはら、文いかばも拙し、或は此曲の原作は實生流に在り、觀世流にて「五條の橋」に立ち出でんと云ひて直にまた「たぢまぢ

理」をもち、辭句の差別を施したるには非るか、以下の文にも觀世は拙く、實生の巧なる所、火からず、川波

添へて、川波も立ち、我も亦立ち、待つといふを陰曆十七日の夜の月の異名、立待の月に云ひ

の云、言ふの音を承けて出す、以下の文、意も確と通らさず、亦短き句に「夕べ程なき」と云ひ、重

何となく心の進む、浪も玉散る、前句「浮き立つ」の「浮き」も「立つ」も共に浪に掛あるより、こ

さままた云ふ、夕顔の花の色、光原氏の長が五條わたりた夕顔の花より五條を喚び起す、と、ら

にて夕顔、夕顔の花の色、光原氏の長が五條わたりた夕顔の花より五條を喚び起す、と、ら

と、ら、音も静に、此後、天和版觀世本、元禄版觀世本、及び現、實生流とも、音も静に、し

音も静に、山塔の鐘、塔は寺院、山塔は山に在る寺といふ程の意なれども、其山といふも所謂

せぬ鐘あり、山塔ありて山に在らざる寺も有る、よければ深き意と見らに及ば

ず、この内、實生流の鐘といふ、鐘の音の過ぐるを杉の本立の間の意に、實生

ふまののらと、すきす、流法本には「杉間の月の」といひてきたる鐘に、實生

どしに、即ち黒草の鐘、附を以て深く深めたる草にて成したるもの、たどすとは鐘の各部を

大鐘、胸丸腹巻等の異形の鐘、草摺、鐘の腹に合せて垂、ゆらり、悠揚、面を向く

手になつ敵、對抗するに張合、川風も、川風も何となく夜深く覺ゆる橋の

白波の、知らずといふを承け、波の縁にて立ち寄り、薄衣、面を向く、薄き小袖、古く、變、外出の時

ん為の連鐘、文の傍と、たるまを、て意味無し、薄衣、面を向く、薄き小袖、古く、變、外出の時

面を向く、薄き小袖、古く、變、外出の時

面を向く、薄き小袖、古く、變、外出の時

面を向く、薄き小袖、古く、變、外出の時

面を向く、薄き小袖、古く、變、外出の時

面を向く、薄き小袖、古く、變、外出の時



經記に此翌月辨慶が清水寺にて半若に達し時、半若女の衣を煩ひ（心苦しく思ふこと）過ぎて行く（天和）  
 引き被きし後控し居たりと思えたるをより作りかゝるべし。煩ひ（心苦しく思ふこと）過ぎて行く（天和）  
 本元祿本共に「過ぎて行く」からか「はつ」と「すは」の聲。志れ者（こゝにはなく）つ  
 「過ぎて行く」。「支へ」（実き支への約りたる）切先切た、ふ重ねて「物々」（物々々々）。小姓（少年を）  
 といふ。俗に小僧。斬ればとて（髪を本、下懸本共に「されば」とあり、「さ」と「き」と假名の似たるよ）  
 子供一人をいかでか正。ちやうと（物を打つ音）。足もためず（足もと）。千々に（様々に）。便（さか）  
 に度さんやとなり。稀代（世にめづら）火久（しき火年）。けなげ（珠）。義朝（源為義の子、後朝、乾頼、義隆等の父、保元）  
 亂に敗れ、尾張野間へ奔り。御事（方、住も氏も）の揃流（の亂に功を以て左馬頭となりし）。平治の  
 て遂に長田忠致に殺さる。世の機縁（三世は過去現在未來の世、機縁は）。九條の御所（を記して、辨慶を先に立て、其の）  
 世の機縁（三世は過去現在未來の世、機縁は）。九條の御所（を記して、辨慶を先に立て、其の）  
 夜の内に山科へ具してははし（中里）。其の後つれて京へははして、辨慶と二人して平家をおわら  
 給ひける（し）とあり。九條の御所云々は據るところを知らず。或は平治物語、平家物語、源平盛衰記等  
 に半若の母常盤若を九條院（近衛帝の皇子）の  
 輔はかる由にせらるに依り、假に斯く作れりや。

四番目 畧二番

橋辨慶

九月 子方 牛若 辨慶 從者

シテ白  
 西塔の傍よ住む武藏坊辨慶  
 まてい。あれ宿願の子細あつて。五條の  
 天神へ。丑の時詣を仕へ。今日満参まで  
 い程よ。唯今恙らそやと存い。いよ。誰ら  
 ある。前よ。五條の天神へ。恙  
 らもむるよ。あるぞ。其分心得い入



畏つてゐる。又申さるゝかき事の昨日五條  
 の橋を通る所の十二三だかりある  
 幼き者ふた刀よて斬つて廻る。なま  
 から標馬の如くある由申すまづく  
 今夜の所物詣の思召馬止り  
 ありありと存る。言語道断の事を  
 申す者あるたとへば天魔鬼神あり

とも。大勢の備も。あつていかに  
 討たざらん。あつていかに不思議  
 議ははづつて。敵を平定せしむるも  
 手近く寄れぬ。目も。思ひも。  
 地上敷  
 シテカニ上  
 ツヨク  
 神変奇特不思議ある。神変奇特不  
 思議ある。化生の物も寄せ合せ。か  
 ころ身討たまらん。都廣と申せ







●小話

地拾子  
ニニニ  
ミミミ  
トトト

あき秋の風地上歌面白の氣色カキやあ。面カキ白の氣色カキやあ。面カキ白の氣色カキやあ。そら浮きさう我ら心。浪も玉散る白露の夕顔の花の色。五條の橋の橋板をさうさうと踏み鳴ら。音も静よ更くる夜よ。通る人をぞ待ち居たる。通る人をぞ待ち居たる。山塔の鐘も

もあまの雲のさう輝く目の夜よ。著たる鐘の黒革のおどろ織せる大鐘。草摺長よ著あつ。もさう好む大長刀真中取つて打ちおろは。ゆらゆらと出でたる有様。ある天魔鬼神ありとも。面を向くはあつありと。我が身あらも物頼もさうて。年よたつ



あまのこころ

仕舞

敵の意一なるに風もはやあつて  
 くる橋の面も備へもあつて  
 まにびよ体らざ  
 白波のさきも寄う渡の橋板をさも荒  
 らあよ踏又鳴さる子方半若彼を思ふよ  
 つもきいやらぬや入来るぞと薄衣  
 猶も一かむむ思ふ寄う渡の橋板をさもあつて

見つけつ

●獨吟  
肝を消す

シテ 辨慶紋を見つけつ立廻 詞をあけん  
 と思へども見れば女の姿ありあつた出  
 家の事あつた思ひ煩ひ思ひ行へ行く  
子方 半若彼を思つて見こと行かぬ思ひたまふ  
 子長刀の柄元をはつと蹴よつた  
シテ 思ひあつた者よ物見せん地上 長刀やが  
 てさう直打切 長刀やさう直えん又



物の見せん。手あまの程と斬つてか  
 れも牛若の少も騒ぎもつづま直  
 つて薄衣もき除けつ。まづつと  
 た刀ぬき放つてつ支へたる長刀の  
 きつたおのよた刀打ち合せつあつ開しつ  
 戦ひつ。何とも志たうけし。手許よ  
 牛若寄るとぞ見さう。たそみ重ね

地拍子  
 放つてつづまへたる  
 トモ

持  
 地拍子  
 二モ

志すつて  
 二モ

て打つた刀よ。さーもの辨慶合せ兼  
 ねて。橋桁を二三間。ますつて肝をぞ消  
 したりける。あら物こーあれ程の。あら  
 物こーあれ程の。小姓一人を斬れど  
 として。手あまよいで。波まへおと長刀  
 柄長くおつまつ。のへて。まづうかづて  
 ちやうと切れだ。そむけてたよ。飛びち



かよ取り直して裾を難き拂へば躍  
 りよつて足もたぬも宙を拂へし頭を  
 地よつて千ごよ戦ふ大長刀うち落さ  
 して力なく組まんと寄れば切り拂ふ  
 もがらんとまもも便あせん方なく  
 て辨慶は稀代ある少人かあそて  
 呈し果てそぞ立つたりける  
 不思議

又  
 地拍子  
 拂ふ

謙や身難あれはまた難き婆よて  
 かほとひあびよちまもそ委しく  
 者のつあそま今何をか包む  
 へおわらん源牛若 義朝の肉子が  
 西塔の武藏辨慶あり互  
 よ君のう念ひ互よ君のう念ひ降参  
 申さしほ免あれは人の肉事われ



生家位も民もけいあびらむよおんあ  
 れ頼むあり。粗忽よや思ひめきらん  
 きりあら。これ又三世の機縁の始。  
 今より後ハ至徳ぞと。契約堅く申し  
 薄衣社かせ奉り。辨慶も長刀  
 打ちかついで。九條の庄所へぞ集り  
 ける。

熊坂

解題

三條吉次を襲ひて平若丸に斬られ、強盜熊坂長太郎の亡霊、赤僧に二名を興へ、昔法をかきりて  
 田向を乞ふことを作たり、其事蹟の傳る所を知らず、或は烏帽子折の二部を返す物を作り  
 たりたるには非るか。古く烏帽子折を現在熊坂とも云ひ、この曲を幽霊熊坂とも云ひたりしが如し。永正十一  
 年十月南都の雨妻の能に演ぜらる。二百十番註同録大釋竹作、能本作者註文に作者不明とあり。

謡の方梗概

是鬼たる原頭、對話に始まり、轉じて殺伐を討入の夜景を叙し、次いで大敵の  
 悲憤をうら、最期に終る。此三段の推移を心にとめ、それく、の序破急を計りて、一曲  
 の風雅を謡ひ表すに力をこめて。

シテ

前は僧形を假らるものかれば、位を聊か靜にとれども、重からしめず、何處  
 へは餘り抑へずして、靡りと大きく出で、以下の問答を何氣なき様にて頼む心にて穩やかに言ふ。地渡し前の  
 離れよとのしは稍しめやかた止む。さへ心此僧は、云々は謀めきたる所をれば、折揚後急に急を留めて、だれ  
 ぬや確りと云ひ、餘所事として、語らうちにも、懺悔の趣有るべきものとす。珠勝なきき柄は、夕世の謡ひ出  
 しの扱にて確りと地に渡すべく、上端は稍引き立て、後には強賊の本跡を頭するものを、これに、男強最  
 宕に太々と大きく扱ふ。此要領にて出のサシを凍々しく、運いきやうに謡ひ起し、夕世の謡ひ、一聲の調  
 子に更へて、強く、有明頃か、つゝかにはどつゝりともあらざり。さそ、三條の、云々はサシの調子にて、すらり  
 と丈夫に謡ひ、以下ワキとの掛合は、浪次強々と地をなく、承け渡り、其必當時の有様を表すに力をこめて、機縁  
 はよきそ、さう、一層、氣勢を進む。熊坂思ふやうには、稍緩やかに靡りと出で、次弟く、に、云々は位を靜  
 めて、弱り行く趣をうつゝ、此松が根の、ワキ  
 氣を受へ、稍引き立て、なつゝりとも、謡ひ、ワキ  
 めやう、次ぎくと、際さす。地  
 にさうらりと、謡ひか、く、地  
 をさうらりと、取、轉に、謡ひ止む。後の、相木の、向を、轉ぐらん、は、シテを、承け、月、は、出で、云々、は、かく、つて  
 さうらりと、乗る、云々、こ、を、徑、云々、は、初句を、確りと、附け、浪次に、位を、進め、勢、好く、捲々と、謡ひ、行き、云々、  
 も、より、息が、ず、に、大きく、靡りと、ある、で、し、尚、次、弟、に、互り、て、長き、地所、を、これ、は、應、所、の、後、急、を、心得、て、氣、合  
 を、鼓、する、心、にて、出で、終の、見、れ、と、の、邊、に、を、火、く、候、めて、止む。次、弟、く、に、は、シテを、承け、て、附け、弱り  
 行きて、し、を、更、に、強、めて、靡りと、キリ、は、摘、下、め、に、し、つ、と、り、と、取、り、寂、し、き、味、は、に、に、強、り、納、む、で、し。



辭解

愛しとは云 世を愛しとて出家せし身ながらいつまで行く方も定 近江路 近に

栗津 大津市の南谷の驛 勢田の長橋 琵琶湖の南勢田に架けたる 野路條

原 野路は浪田村の東北一里ばかり、今は栗田野天橋と合して老上村といふ、昔は野州郡の條原

を、あて 夜明けに光をちての意竹又は藤の類の節の向を 青野が原赤坂 共に美濃國不

一本の松 細川忠勝の歌の詞書(老木雪松)に「青野が原にいと古りた

なすらねば云 通道の調にて現に東京地方にて通道を往東と稱する類なり 法界衆生云

宇宙のあらゆる衆生が法界に佛陀の大慈悲を 回向は草木 逆善回向の功德は非情の草木園土

持佛堂 佛堂を安置する堂舎 佛堂を安置する堂舎

兵具 武具 初發心 発心出家してよりま 垂井青墓 赤坂の北なる兒

子安の森 安神社の森 雨のうちに 高荷 馬に高く附

殊勝なき 僧侶として殊勝ならしからざる多病の意 但し、舊本には「しし」なり

似合はぬ僧の 僧に不相應なる脱五、さうならぬ佛 彌陀の

利劍 彌陀の名流は一切の罪障を断滅するが故に之を利劍に譬へ 愛澤は云 愛澤明王は之而か臂

多聞は云 我國にて古來鎮護國家の天神として多聞天といふ子に

方便の殺生 佛菩薩が衆生に縁を結ば 六度 布

非知らぬ 評しき詞なり、或は 心の師 涅槃經に「觀作心 までろまん 眠藏 後室釋家

壯鹿の角 萬葉集の歌「夏野ゆく壯鹿の角の東の向も妹が心を忘れて念へぬに出でし詞、夏の

聲佛事 誦經念佛の如き聲 東南に風 志賀、吳服に東南に雲、

夕間 日暮ちて月出 弓手 左の 馬手 右の 安婆の執

熊坂長靴 異本義經記に「熊坂張靴といふ盗人、和賀國熊坂の者とぞ、美濃國赤坂

三條の吉次 平治物語に「奥州の金商人吉次、義經記に「三條に大橋長者あり、其

河内の覺紹 以下、磨針太郎、三條の衛門、壬生の小藤、源光の若、三國の九郎等、皆盜人の名

加勢 以下、磨針太郎、三條の衛門、壬生の小藤、源光の若、三國の九郎等、皆盜人の名

河内の覺紹 以下、磨針太郎、三條の衛門、壬生の小藤、源光の若、三國の九郎等、皆盜人の名

加勢 以下、磨針太郎、三條の衛門、壬生の小藤、源光の若、三國の九郎等、皆盜人の名



上野の豊岡の原八木と名を列せられたり。表討 一面より討ち入り。火ともしの上手 ね明をつけて夜討をする。その名鏡の宿の地盤の條に「油さしたる車ね明を火をつけて天に揚り上げたれば外は分け切り周けれど内は日中のゆうに揚る」とあり。ね明といへども大仕掛のものなり。分け切りは押し分けたり入る意なり。或は押し分けたり入る意なり。究竟の手柄の 云 地盤に就いて一庫の手柄を有する曲者。しれぬ。目付を 云 京都出度以来これ等の強盜寺が吉沢の通る。數百 色々。牛若 長陸の機嫌はよきぞ 機嫌はよきぞ。いふことを程も久しけれ 言ふ方が動作に比して冬より意行疫神 病鬼を用ら神令若物法。元き釋者等圖書に多く見ゆ。ヨウヤクジンと讀ふ。獅子奮迅 法華經に「獅子奮迅之力」。捨棄故に獅子奮迅。虎豹 じやうや。技業やしたや。或は「笑止冠者 若輩 孝養 ひとつと父母の爲に進退するをいひしが、折に「妻子を折戸、妻といふを一つ。小楯 身をかはさる。打物わざ 斬り合ひ。面廊 廊下、平家物語條に「あそこの面廊に遊びかけては、はたとわりこい。詰り 戸壁などの行き止り。陽炎 陽炎は長閑なるくま上る水蒸氣。稻妻は電光。それに水に映れる月を言ひ重ねて捕捉し難き壁とす。ゆうつけ 鶴の異稱。言ふの音を承く。

五番目ヨリ末畧二番

熊坂

九月 ワシテ 熊坂長範(前僧)

早次第上  
 憂へて捨つる身の憂へて  
 憂へて捨つる身の行くところか定む  
 らん 此の都方より出でたる僧よ  
 への。われ未だ東國を見む程よ。唯  
 見む程よ

道行上  
 今思ひまゝ重國修行とびさるる  
 山越えて。此江路をれや湖の此江路  
 打切

集反











安置一給よるる繪像本像の形も  
 なく。一壁より大長刀。拄杖よあらざる  
 鐵の棒。その外兵具をひびく。とて  
 置あてらる。何と申したる。馬車よとて  
 かく。此僧は未だ初發心の者よと  
 ゆる。後隨ふ如く此あたりの。垂井青墓  
 赤坂とて。其里より多む。む。この

道よから。青野。原の草一高く。青墓  
 子安の森。景よ。書い。ぬ。の  
 うちよ。山。賊夜道の。入。高。奇。を  
 落一里。道。の。た。や。は。た。の。者。ま  
 とも。ち。書。か。ぬ。て。か。か。ぬ。か。か  
 の時。此。僧。も。何。の。あ。ら。わ。か。わ。し。  
 い。た。り。思。僧。も。何。の。あ。ら。わ。し。







されば心の師とあり。心を師とせざれ  
 と古き詞は知られたり。かやうの物語。  
 申さば夜も明けをまじお休みあれや  
 お僧たちわれもまじらまじらせと  
 眠藏ののよと思つらう。形も失せ  
 て庵室も草むらとありて松蔭よ  
 夜を明したる不思議はよ夜を明し

たつ不思議さま

中入

早上教  
待話

一夜臥も。牡鹿の角の東の向も。牡鹿の  
 角の東の向も。寝られんものか秋風の  
 松の下臥夜も。きから聲佛事をや  
 あぬらし聲佛事をやあぬらし

後シテ上  
出端

東南の風うつて西北の雲静か  
 夕闇の夜風起し山陰よ  
 梢木の



向や駈ぐらん 有明頃らりしや

<sup>地上</sup>月ハ出でても臙夜あるべし切り入れ

攻めよと前後を下知し弓手や馬手

よ心を配つて人の實を奪ひし懸望

<sup>早行</sup>安は安の執心これ皆隨せし淺ま

熊坂の長靴よてもあまもまきか其時の

有様物語りしや <sup>シテ上</sup>おても三條

の吉次信高とて黄金を高く商人あ

つて毎年數駈の寶を集めて高荷

を作つて奥へ下るあつたれこれを取

らだやと與方の人数誰とぞ <sup>早カレ上</sup>おして

國より集まりし中より取りても誰が

ありしぞ <sup>シテ中</sup>河内の覺銀磨針太郎

兄弟ハ面討より並びあり <sup>早カレ上</sup>おして又



都の其うち多きは中にも誰が  
一ぞ 三條の衛門土生の小猿  
はまののちまわけありは  
らよよのちまわけありは  
越前シテ白の 麻生の松若三國の九郎  
加賀早カレ上の國よ 熊坂シテ白の 此長範を  
始として。完喜早カレ上の手柄の志の者等。

十十人の興かして 吉次早カレ上が通る道  
まがら野も山も宿泊も目附を  
ついでついでを見き 此赤坂シテ白の宿よ  
著く。いそいそ完喜早カレ上の處をれ。根き場  
も田早カレ上がよ道多し。見入る宵より遊者  
も意早カレ上數百の遊時を移す 夜も更  
けゆけだ吉次早カレ上兄弟。前後も知らむ



一たりよ シテ 十本のふ男の目の

うち入 シテ 勝れた シテ 勝つたのあはれ

物向の シテ 物向の シテ 物向の

口かん上 小 シテ 牛若殿

と シテ 牛若殿 シテ 牛若殿

の シテ 機嫌 シテ 機嫌

の シテ 程 シテ 程

こそ程もスーけれど皆むさかつかも松  
目を投げこみ投げこみおれぬ勢ハ  
行疫神も面を向くおやうそあは  
然れども牛若子がい怒る氣色なく  
小太刀を抜と渡り念ひ獅子奮迅  
虎鬣の飛鳥の翔りの手をくたさ  
攻め戦へた人も面をむく十三人



同ト枕み切り伏せられ。其外手負ひ  
 太刀を捨て具足を取られ。遠く逃  
 遁げて命を免るもあり。熊坂  
 云ふやう。此者どもを手の下よ。討つ  
 いらぬまゝ鬼神人間までいよもあら  
 盗も命のあつてこそあらば。や  
 引おこして。長刀杖より。ちめた

仕母

くもーさけるが。熊坂思ふやう  
 熊坂思ふやう。ものくー其冠者  
 斬つといふも。さぞあるらん。熊坂  
 術を奪ふ。あら。あつ。天魔。鬼神  
 あり。も。中。よ。つ。あ。んで。微塵。よ。あ  
 討たれたる者ども。の。いで。供養。よ。報  
 せん。と。道。より。取。つ。て。返。一。例。の。長。刀







斬れぬ。さういふものこそ斬らるゝ  
 事。の腹さかへんか。いふは命の  
 軍の極めぞ無念ある。うち物あざ  
 めて。痛よ。あ。うち物あざめて。痛よ  
 あり。手取りよせんとて長刀投げ捨て  
 大手をひらげてこの馬道か。この  
 つまらぬ。落つかけ。落つつめ取らんと

地拍子  
 捨す。大拍を  
 とも

まつても陽炎稲妻。水の月かや姿の  
 見つても手は取らぬぞ。次第次第  
 第一は重手ハ負ひぬ。次第次第は  
 重手ハ負ひぬ。猛まじ。力も弱り。弱り  
 行きて。此松が根の。苔の露霜と。  
 消え。昔の物語。末の世助けなび給  
 へ。と。つひも。昔げ。渡。夜も白と。赤



十  
 坂の松蔭よ隠れけり  
 松蔭よ隠れ  
 かくれけれ

### 小督

#### 解題

中秋の月夜、嵯峨野のあたりから小督の向の隠れ家を訪ひ、源仲國室吉を侍ふることを作  
 れり。平家物語に據りたる作にて、原文に従ひたる所火からず。古き別名を仲國といふ。  
 能本作者註文及び二向十番註目録に金春禪竹の作とあり。禪風習通目録に曲名見ゆ。

#### 謡ひ方便概

ワキとの向答は茶しく空を舞す。舞すは心にて舞に確りと應へ、時の面同長つてしをすつらりと扱ひ  
 て地に渡す。後の出「あら面白の」以下駒の段は、明月に鞍を上げて浴外の名勝に駒をすむる心を、暗  
 れやかに勢よくすらしり。謡ひ起し「夜の歩みぞ心せよ」と先づ確りと止め、氣の抜けぬやうに吟を便へ  
 て「杜康なくのクリを大きくむつら」と謡ひ起し、引きたてて謡ひ後く「我が家居の假をれどはクセの  
 上端の如き味はひをらべし」と謡ひ起し、引きたてて謡ひ後く「我が家居の假をれどはクセの  
 確りと、門さされては、さうさうと、言ひて、想をおさへ」とかたり、これは空を舞の「さうさう」と謡ひ  
 「やいかにをませ給ふ」とも、さうさうと、言ひて、想をおさへ」とかたり、これは空を舞の「さうさう」と謡ひ  
 を火し、読め、連吟の止めを、しつらと、吟む。「畏つては、消極く、言ひ、一息おきて、動説に任せ、以下を、確りと、扱  
 ふ。ロンキは、別れと、いへど、返事を、え、望みを、逐けて、帰る、か、は、心、中、に、喜、を、含、み、て、確、り、と、承、り、渡、し、  
 「浦宮の、なり、て、さう、は、一聲、の、調子、にて、引き、立て、く、ゆ、つ、た、り、と、月、夜、よ、し、は、爽、やか、に、ワ、キ、は、朗、か、た、ら  
 り、と、言、の、葉、した、ま、さ、居、の、海、心、は、  
 分を、更、て、乗り、よく、丁寧、に、謡ふ。  
 ツレ、り、と、て、平、手、の、重、衡、の、如、く、重、々、と、は、謡、ひ、さ、ら、も、よ、く、品、位  
 を、保、ち、て、聲、調、澄、和、た、と、こ、と、も、な、す、思、に、沈、め、る、佳、人、の、姿、を、も、ら、べ、し、サ、シ、は、粘、り、の、を、招、き、し、儂、に、さ、さ、り、く  
 扱ひ、同じ、位、にて、連、吟、に、入、る、シ、テ、と、の、向、答、舞、合、は、シ、テ、よ、り、も、稍、高、め、に、取、り、し、か、も、輕、か、ら、ず、と、て、な、し、  
 「も、よ、り、も、云、々、は、稍、し、め、か、に、扱、ひ、て、心、に、行、く、末、の、逢、ふ、瀬、を、案、ず、る、舞、を、ら、べ、し、ト、モ、シ、テ、ゾ、レ  
 亦、同じ、く、ロンキは、稍、さ、ら、り、と、扱、ひ、て、心、に、行、く、末、の、逢、ふ、瀬、を、案、ず、る、舞、を、ら、べ、し、ト、モ、シ、テ、ゾ、レ  
 とも、これ、は、重、ゾ、レ、に、從、ふ、侍、女、が、れ、は、徳、ト、マ、  
 輕、く、扱、ひ、連、吟、は、兄、ト、シ、レ、に、合、せて、謡ふ。  
 ワキ、大、臣、ワ、キ、が、れ、は、火、り、も、た、り、  
 地、初、の、上、段、は、初、句、を  
 より、稍、さ、ら、り、と、  
 雲、居、に、翔、れ、時、の、ま、も、と、物、つ、て、止、め、を、鎮、め、て、吟、む、い、さ、く、さ、ら、は、の、下、段、は、稍、ゆ  
 る、やか、に、波、の、上、段、は、暢、び、く、と、あ、る、べ、し、  
 嵯、峨、野、の、方、の、ま、も、は、承、け、て、ゆ、つ、た、り、と、出、で、明、月、に、鞍、を、あ  
 けて、と、さ、ら、り、め、た、駒、を、早、め、思、お、ん、と、火、く、か、ら、し、め、し、や、と、思、ひ、ま、は、心、に、し、て、附、け、駒、を、か、け、寄、せ、寄、せ、と、











月夜よし古今集の歌に「月夜よし夜よし」と人に告げ 木枯た源氏物語の歌に「木枯たふきあは  
 すめる苗の香やひき留あらはこてふにたり侍たすし 物思源氏物語の歌に「物思ふにまぢまふくも  
むべきことの業もいなし 物思あらぬ身の袖うちみりしにりきや 嬉古今集の歌に「嬉しさを何にさまたる  
衣袂ゆたかに裁てといはすし

四番目  
畧二番

# 小督

八月

ワシツト  
キテレモ  
侍小督局女  
源仲國  
教使

早付

いそいで高倉の院よ仕入奉る臣下あり。

情も小督の局と申して君の恋寵愛

の座座の中言ふ心も相國の消息

女あはれぞ世の憚つを思ひめけるが

小督の局暮よ更せ給ひての君の所歎

限あ書い夜のおまひより給ひ夜ハ

小督の局と



又南殿の床より明させ給ひの所より小督  
の局の所より嵯峨野の方より唐座  
は由間一め及び及び意ある彈正の太衛  
仲國を召して小督の所より召し入るを。  
尋ねて来たとの旨旨を任せ唯今仲  
國が私宅に召し出され仲國のあた  
りよりシテ謹んで御つとせト ト ト

旨旨を承りしより小督の所より召し入る。  
嵯峨野の方より唐座は由間一め及び  
及び給ひ。意ある尋ね出され此唐書を與  
しよとの旨旨を承りしより シテ旨旨を承りし  
承りしより嵯峨野の方より唐座ある處  
より申上る ト 嵯峨野の方より唐座折戸  
また唐座の所より由間一めを召し入る



お出の賤家より片折りと申を

ものい。今夜八月十五夜よての向。

琴弾ま給あぬ事あらう。監督の局の

事調をば。同事を知つての向。侍は安く

思めせと。委しく申し上げられた

早此由奉聞申しられた。法威の餘り奉

くも。寮のお馬を給あぬ事あらう。時の面

目畏つて。地上歌。やぞ出づるや秋の夜の

やぞ出づるや秋の夜の。月毛の駒よ心

して。雲居よ翔れ時のまも。急ぐ心の

ゆくりあも。急ぐ心の。中入

げよ。一樹の蔭よ宿り。一河の流れを

汲む事も。皆これ他生の縁ぞか。

あからなまある事あらう。馴れて程経



軒の草。志のぶたより。賤の女の  
 目よありある。世の習。あかぬ人の  
 ころあか。地下秋中。かて。さくさく  
 音もさくさく。上秋。あめてや  
 志さく慰むと。あめてや志さく慰むと。  
 秋風よたぐ。秋風よたぐ  
 声も悲みの秋や恨むる

窓や夏を。何やらくねる女郎花。あれ  
 も夏をのびのびの身ぞ。人よ語るか  
 此有様も。あら面白の  
 ちりからやあ。三五夜中の新月の色。  
 千千里の道も遠からぬ。敵慮畏き較  
 ちうけて。いも勇む駒の足並。夜の歩を  
 かせよ。牡鹿あく。此山里と詠めける



地  
 巖城野の方の秋の空をいそいそと澄  
 み渡り片折ぐをきるべし。明日よ  
 鞭をあげて駒を早め急がん。賤が  
 家居の假あれど。か。やと思ひ此處  
 か。駒を駆け寄せ駆けよせて  
 控へ控へ聞けども琴ひく人のあかり  
 けり。月よあかれ出で給よ。法輪よ

急れば琴こそ聞え来よけれ。嶺の嵐が  
 松風をそれらあらぬ。琴ぬる人の琴  
 の音が樂か。何ぞと聞きたれが。決を想  
 いて。戀する名の想。決意あるぞ。嬉し  
 美し。もあまふ。督の局の序調よ。てい。  
 やどて業向を申せ。まよひのまよひ。  
 此戸あひをせ給へ。誰をや。いよ入音







地拍子  
教説

●小話

せとの教説をば何とせん隔て給ふや  
 中垣の葎が下よりさらば今宵ハ  
 片敷きの袖あれて月よ明さん  
 上敷 處を知るも嵯峨の山處を知るも  
 嵯峨の山は幸絶えり跡ながら千代  
 の古道たどり来りゆくも君の恵  
 ぞと羨まき情の色香をも知る人のみ

ぞ花鳥の音よたまたまあつま屋の  
 まんじら知るぞ調ひ隠よもあら!

仲國侍目よからさらん程ハ帰るま

一かゝつてあのおの紫垣のまゝの  
 れて舟入りの教説も由し痛か  
 どの何れもか忍ばせ給ふか  
 くれ葉らやあらん







まことそ

居より猶残の身の露の世を憚りの  
心もよもよもよと涙ありけれ  
げよ  
や訪をれてぞ身よ白玉のおのづから  
あぐらへて身よ白玉の年日も嬉あり  
けるほまひも  
たをを知らも  
敷ならぬ身よ白玉の年日も嬉あり  
妹背の道に隔るは紋の漢玉の其昔

● 蜀吟

地拍子  
傳まで身

甘泉殿の夜の思堪ぬ心や胸の火  
の煙よ残る面影も 見へ程あま  
あましの色  
あまの契か  
唐帝のいもへも驪山宮の私語漏  
れし始を尋ぬるよあたる露の浅  
茅生や袖よ朽ちり秋の霜忘れぬ  
夢を訪ふ嵐の風の傳まで身よ志



めらるるなりけり 美人の國まで訪ひの  
家を知れし常ならず 地のまかせを思ひの  
敷る餘りわづあむ 心身を碎き  
てもやまの遠暮の私あるもあや  
らしきまじり同 世の頼も有明の  
月の都の外までも 敵慮よある  
馬鹿のまの 田を 裁られ 宿りと同

あてあふる 答へん  
まであつや から まして 直のお返事  
賜 らう 時暇 申 並ち 出づ 目よ  
と 宿りの假の露の中よ から 限の  
所使 おもひ での 名残 ぞと 暮 心ひて 落  
つる 涙 あな 地上 舞 も の や 日 あ ひ の  
今 稀 ある 中 あり と 遠 よ 遠 よ



瀬ハ 程<sup>地</sup>あらう。人の身車<sup>フチクルマ</sup>の頓<sup>ト</sup>て  
 こゝろ<sup>ココロ</sup>素らめと。とどろき<sup>トドロキ</sup>名残<sup>ナノコ</sup>の心<sup>ココロ</sup>とて  
 酒宴<sup>シユウエン</sup>を<sup>シテ</sup>あて糸竹<sup>イトタケ</sup>の 聲<sup>コエ</sup>澄み渡<sup>スミワタ</sup>る。  
 月夜<sup>ツキヨ</sup>かあ 月夜<sup>ツキヨ</sup>より 木枯<sup>キカラ</sup>よ。  
 吹<sup>フク</sup>き合<sup>アヒ</sup>あめ<sup>メ</sup>の笛<sup>フエ</sup>の音<sup>ネ</sup>を 地<sup>チ</sup>上<sup>ノ</sup>に<sup>シテ</sup>留<sup>トド</sup>む  
 ちの葉<sup>チノエ</sup>の葉<sup>エ</sup>もあ。ちの葉<sup>チノエ</sup>もあ  
 言<sup>コト</sup>の葉<sup>エ</sup>もあ。 言<sup>コト</sup>の葉<sup>エ</sup>もあ。君<sup>キミ</sup>

のは<sup>ノ</sup>は<sup>ハ</sup>心<sup>ココロ</sup> ちの<sup>チノ</sup>身<sup>ミ</sup>も<sup>モ</sup>も<sup>モ</sup>物<sup>モノ</sup>思<sup>シ</sup>よ。  
 ま<sup>マ</sup>ら<sup>ラ</sup>舞<sup>マユ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>心<sup>ココロ</sup>分<sup>ワ</sup>り<sup>リ</sup>て  
 嬉<sup>ウレシ</sup>し<sup>シ</sup>何<sup>ナニ</sup>も<sup>モ</sup>何<sup>ナニ</sup>も<sup>モ</sup>唐<sup>カラ</sup>衣<sup>イ</sup>ゆ<sup>ユ</sup>た<sup>タ</sup>よ  
 袖<sup>スリーブ</sup>打<sup>ウ</sup>ち<sup>チ</sup>合<sup>アヒ</sup>せ<sup>セ</sup>唐<sup>カラ</sup>眼<sup>ガン</sup>申<sup>マシ</sup>し。急<sup>イサ</sup>ぐ<sup>グ</sup>心<sup>ココロ</sup>も<sup>モ</sup>勇<sup>ユウ</sup>め  
 の<sup>ノ</sup>駒<sup>ウマ</sup>よ。ゆ<sup>ユ</sup>ら<sup>ラ</sup>り<sup>リ</sup>と<sup>ト</sup>ち<sup>チ</sup>乗<sup>ノリ</sup>り<sup>リ</sup>。帰<sup>カエ</sup>る<sup>ル</sup>姿<sup>サマ</sup>の  
 あ<sup>ア</sup>と<sup>ト</sup>は<sup>ハ</sup>く<sup>ク</sup>と。小<sup>コ</sup>督<sup>トク</sup>の<sup>ノ</sup>見<sup>ミ</sup>送<sup>オウ</sup>り<sup>リ</sup>仲<sup>ナカ</sup>國<sup>クニ</sup>ハ。  
 都<sup>ミヤコ</sup>入<sup>イ</sup>り<sup>リ</sup>て<sup>テ</sup>帰<sup>カエ</sup>り<sup>リ</sup>け<sup>ケ</sup>れ。















寅よ起き野に床の眠も今も  
 假寝の月の影も西へ行くが  
 足利の大和の國よ著まはり大和の  
 國よついでに

春日の里よ著まはり入を待ちて此

あたりの名所をも尋ねよと存る

春日野の飛火の野守せいで見れば

今幾程ぞ若菜摘む  
 たる老人は此春日野よ年を経て山  
 もも通ひ里も行く野守の翁よ  
 ありありがたや慈悲萬行の春の色  
 三笠の山よ長閑よ五重唯識の秋  
 の風春日の里よ昔信じて眞よ誓も  
 直なる神のまよく行かぬ軍よ



歩も積る老の榮ゆくは影行ぐあり  
下秋中 唐土までも聞えある此宮寺の名ぞ  
上敷 高き昔仲麿が昔仲麿が我り日の  
 本を思ひやり天の原あつさげ見ると  
 詠めける。三笠の山陰の月ももそれ  
中 明州の月あれや。さる奈良の都の  
 春日のやうかきも春日のやうかき

●小話

気色あつて。さうしてある老人よ  
 春ぬれかきかき。何事かを言ひ奉ねらぞ  
早 身は此處のへら。かこころいはい此  
 春日野の野守もさる。野守もさる  
 まりまらぶ。いりよ由あつげある水のほと  
 老のあつ水もさる。さる野守の  
 鏡と由まき水もさる。あつ面白や野















畏き時代にて狩も敷き春日野の  
 飛火の野守出てもびて敵慮よかり  
 身あらら老の思出の世話を申せま  
 び涙をあ申せまきむ涙をあ  
 昔の物語聞かよつてま真の野守  
 の鏡見せ給へ思ひまの事  
 それを鬼神の鏡あれどいふて見せ

地拍子  
 水鏡を見給へ  
 上モ

上 水鏡のあつて聞かよ  
 まる春日野の野守といふもあれ  
 ありバ鏡はあどか持たざらん  
 鏡をせ給へや鬼神の持たたる鏡あら  
 見せぬ恐れや志給せん真の鏡を見ん  
 事かありまろの鷹を見し水鏡  
 を見給へと塚の内よりのよけり塚



の内をみるよける

中入

<sup>早かん上</sup>かゝる奇特よあり幸もこれ行徳の故  
 ありと思ふ心を使ひて鬼神の位みけ  
 塚の前まで肝膽を碎き祈りけり  
 あれ年行の功を積めるその法力の  
 真あらぶ鬼神の明鏡現してわれよ  
 奇特を見せ給へや南無帰依佛

後上  
出書

あつたや天地を動かす鬼神を感ぜ

にめ <sup>池上</sup>土砂山河草木も <sup>シテ</sup>一佛

成道の法味よ <sup>池上</sup>あられて <sup>池上</sup>鬼神よ

横道 <sup>早かん上</sup>曇る野守の鏡 <sup>池上</sup>現れたり

<sup>打上</sup>怒りや <sup>早かん上</sup>打火輝く鏡の面よ映る鬼

神の眼の光を向くおや <sup>池上</sup>あはれ

<sup>シテ</sup>恐れ給へ帰らんと鬼神の塚よ入ら



●仕舞

地拍子  
ちうき  
ん

んま 暫らく鬼神待ち終る夜は  
 まだ深き後夜の鐘 時とら伏せ  
 野守の鏡 法味ようつり終るとて  
 重ねて珠敷を 押し揉んで 大嶺  
 の雲を凌ぎ大嶺の雲を凌ぎ年行の  
 功を積むとて千餘箇日屢く身命  
 を惜まきて採果汲水よひまを得む一

新加羅之制多伽三よ俱利伽羅七丈  
 八丈金剛童子 東方 東方降  
 三也明も此鏡よ映り 又ハ南西  
 北方を映せば 面玲瓏と明やよ  
 天を映せし 非想非非想天まで  
 隈なく 又大地をかくみ見れば  
 まづ地獄道 又まづハ地獄の有様



を現も一面ハ丈の淨玻璃の鏡と  
 して。罪の輕重罪人の呵責。打つや鐵  
 杖の數々。悉く見えたり。さてこそ鬼神  
 の横道を正ま。明鏡の寶あれ。もハヤ  
 地獄よ帰るぞと。大地をわつと踏  
 みあら。大地をわつと踏み破つて。  
 奈落の底よ。みりよける。

496

大正十年八月十四日印刷  
 大正十年八月十八日發行  
 觀世流改訂謹本  
 第四版・大正版  
 訂正者 丸 岡 明 桂  
 相續者 丸 岡 明 桂  
 東京市神田區今小路三丁目九番地  
 發行所 土居源太郎  
 東京市神田區東松下町十三番地  
 印刷者 鈴木 彌 作  
 東京市神田區東松下町十二番地  
 印刷所 信英堂印刷所  
 東京市神田區今小路三丁目九番地  
 發行所 觀世流改訂本刊行會  
 電話九段 二三〇五番  
 振替東京 一三四七五番



終

